

防災学習で行動考える

10月15日、長野市豊野町豊野の豊野中学校（全校生徒242人）の2年3組で防災授業が行われた。台風が来る数

日前から、いつ、どのような対応をするかを時系列でまとめた行動計画「マイ・タイムライン」について、出席した



強いトラウマ 配慮必要

生徒25人が家族で話し合った計画を発表した。

中村由依さん(14)は、警戒レベル1の発令で父親が買い出しに行き、レベル2に上がると「私がモバイルバッテリーを充電する」との計画を立てた。中村さんは「友達はお風呂に水をためたり、車にガソリンを入れたりと違った視点を持っていた。改めて家族と相談したい」と話した。

千曲川の支流・谷川が増水して被害が出た佐久市入沢地

区では今年9月、区長の渡辺一夫さん(68)が青沼小学校の4年生6人に防災無線や消防団の広報車を通じて避難を呼びかけた経験を語った。防災学習の一環として同小が招いた。渡辺さんは「普段から災害時の行動を話し合い、早めの避難を心がけてほしい」と話す。

ただ、過酷な災害を経験した子どもたちは、被害を思い出すことで不安や恐怖に襲われることもある。

校舎が約1.5m浸水し、全校児童の約8割が避難先から登校している長沼小学校（長野市津野）。下育郎校長(58)によると、大雨が降ると不調を訴える児童もいるという。

児童会長の西片俊太君(12)が6年生16人に対し、台風から1年の節目に催しを開催す

べきかを尋ねたところ、3人が「つらい思いを捨てて楽しい行事をやりたい」、13人は「悲しい気持ちがあよみがえる」「思い出したくない」との慎重な意見だった。

同小はアンケートも参考に、今月13日の催しは、校舎や体育館の復旧工事を行った関係者に寄せ書きを渡す「感謝の会」とした。下校長は「ハードが復旧しても気持ちはすぐには元に戻らない。誰も傷つくことがないように、細心の注意を払わなくてははいけない」と話す。

東京女子大の広瀬弘忠名誉教授（災害・リスク心理学）は「被災経験を基にした防災学習は有効で、同様の被害を生まないためにも必要不可欠だ」としながら、「強いトラウマを抱えた子どもは、教師や保護者が個別に話を聞く機会を定期的に設けるなどの十分な配慮が必要。子どもたちの反応を見ながら時間をかけて両立させることが望ましい」と指摘している。